学習者をアクティブにする交流活動の実践
ソーシャル・ネットワーキング・アプローチをもとに

ベトナムにおける日本語教育は、現在ようやく教師主導型の教育から学習者主体の教育へと転換を迎えているところである。この状況を踏まえ、発表者が所属する大学では学習者がアクティブに活動に参加できるよう、さまざまな工夫を行っている。その活動の中で、本発表では、日本の高校生と対面で行った交流活動について報告し、それをソーシャル・ネットワーキング・アプローチ（當作, 2014）をもとに分析する。

この交流活動では初中級レベルの学習者を対象に、次の 3 つの目的のもとに行った。①日本語の既習文法や語彙を応用する機会の提供、②活動前の準備、活動への参加、活動後の日本語学習への動機の向上、③文化交流を通した社会とのつながりの構築、である。活動のトピックは、「外来語」と「お知らせ／標識」である。「外来語」では、ベトナム人学生と日本人高校生がそれぞれの言語における外来語を準備し、その意味や読み方などを日本語で聞き合う活動を行った。また、「お知らせ／標識」」では、日本の高校の掲示板などに貼られているイベントのチラシ、またベトナムの交通標識などを用意し、その内容について質問し合う活動を行った。

この交流活動を通して、学習者は既習文法や語彙の理解また日本の高校生活に関する文化理解が深まっただけではなく、日本語を話すことに自信を持てるようになっていた。これらの結果を、ソーシャル・ネットワーキング・アプローチの「言語」「文化」「グルーバル社会」の 3 つの領域と「わかる」「できる」「つながる」の 3 つの能力、および 3 つの連携の観点から考察する。その上で教師の役割についても述べる。